

しろばんば

井上 靖



新潮文庫

しろばんば



定価 440 円

新潮文庫 草 63 L

昭和四十年三月三十日 発行
昭和五十四年四月十日 二十七刷

著 者 井^{いの} 上^{うえ} 靖^{やすし}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

し ろ ば ん ば

井 上 靖 著



新 潮 社 版

しろばんば(全)

前編

一章

前編一章

5

その頃、と言っても大正四五年のこと、いまから四十数年前のことだが、夕方になると、決って村の子供たちは口々にしろばんば、しろばんばと叫びながら、家の前の街道をあっちに走ったり、こっちに走ったりしながら、夕闇のたてこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。素手でそれを掴み取ろうとして飛び上ったり、ひばの小枝を折ったものを手にして、その葉にしろばんばを引っかけようとして、その小枝を空中に振り廻したりした。しろばんばというのは「白い老婆」ということなのであろう。子供たちはそれがどこからやって来るか知らなかったが、夕方になると、それがどこからともなく現れて来ることを、さして不審にも思っていなかった。夕方が来るからしろばんばが出て来るのか、しろばんばが現れて来るので夕方になるのか、そうしたことははっきりとしていなかった。しろばんばは、真っ白というより、ごく微かだが青味を帯^おんでいた。そして明るいうちは、ただ白く見えたが、夕闇が深くなるにつれて、それは青味を帯^おんで来るように思えた。

しろばんばが青味を帯^おんで見えて来る頃になると、帰宅を促すために子供たちの名を呼ぶそれ

ぞれの家の者の声が遠くから聞えて来た。「ゆき、ごはんだよ」とか「しげ、めしだよ」とか、「早く来んとめし喰わせんぞ」とか、そんな声が、遠くから聞えた。すると、幸夫が居なくなり、次に茂が居なくなるといった具合に、子供たちは一人減り二人減りして行った。

子供たちはお互いに何の挨拶もしなかった。しろばんばの浮游している夕闇の中を、けんけんしながら家の方へ走って行く者もあれば、ひばの枝を右手に高く翳して、家の方へ勢よく駈けて去って行く者もあった。それぞれ各自の家に呪文でもかけられたように吸い寄せられて行った。

洪作はいつも一番遅くまで遊んでいた。洪作のところは夕食が遅く、洪作の遊んでいるところへ夕食を報せにおぬい婆さんがやって来るようなことはめったになかった。だから、洪作は毎日仲間が一人残らず居なくなってしまうまで街道で遊んでいるのが常だった。そして友達のためにも居なくなり、夕闇があたりをすっかり閉じこめてしまってから、自分の家の方へ歩いて行った。

洪作は自分がおぬい婆さんと一緒に住んでいる土蔵に帰り着くまでに、街道に沿った家々の幾つかの明るい夕食の灯を眼にした。子供たちの遊び場は、部落の者たちがお役所とか御料局とか呼んでいる帝室林野管理局天城出張所の正門前に決っていた。そこから土蔵までの間に、道に沿った家はほんの数えるほどしかなかった。お役所の前に洪作の家の本家に当る「上の家」という屋号の家があった。ここには洪作の祖父と祖母と、そして洪作の母の弟妹たち、つまり洪作にとってはお父お母に当る男の子や女の子が居た。一番末のみつは洪作と同年であった。

洪作は本家の明るい灯を見、そこに自分の母方の祖父母が居ることを知っていても、そこを覗

くことはしなかった。昼間はみつのところへ遊びに行ったり、用事がなくても何回も自分の家と同様に上り込んだりしていたが、夕食の時は、その灯に妙に疎遠なものを感じた。ここはお前の家とは違うのだぞ、お前の家は土蔵なのだぞというようなものを、一家の者たちが賑かに談笑しているその雰囲気に感じた。

時に、何かの用事で、洪作は本家に上って、みなが夕食を食べている席に顔を出すことがあったが、そうした時、祖母のたねは、

「洪ちゃ、ここで食べて行きな」

と、必ず声をかけてくれた。

「ううん、うちへ行って食べる」

「ここも、お前の家だな。そう嫌わんで食べて行っておくれ」

「ううん、おら、いやだ」

洪作は祖母たねが何と言っても、執拗にその招きには応じなかった。祖父やその他の者たちは、そうした時大抵洪作のことなどには気を奪^とられず勝手に箸を動かしていた。洪作はそうした本家の食事時の雰囲気には反撥せざるを得ないものを感じた。食事時でない時は、自分の家と同様に振舞っていたが、食事時だけは歴^{れっき}とした他人の家になった。自分の家でもないのに、御飯など御馳走になるものかといったところが、洪作の気持の中にはあった。

この本家の隣りに小さい路地を挟んで雑貨屋があった。小さい店に金物類を初めとしていろいろな雑貨が土間からはみ出す程ぎっしり詰まっていた。村ではただ一軒の雑貨屋であり、金物屋

であったので、針金とか釘とか鍋とか庖丁とか、そういった物を買う時は、村人はみなこの店へ来た。

そしてその隣りは「さどや」という屋号の農家で、母屋おもやのほかに牛小屋があつて二頭の牛がいつも暗い中に鼻をうごめかしていた。そのさどやの前に、日傭やとい仕事をしている文吉ぶんきちという独身の四十男の住んでいる小さい家があった。この文吉の家の隣りが、部落では一番庭らしい庭を持った洪作の家の屋敷になっているが、今は母屋の方は東京から来て村医をしている医者に貸し、屋敷の裏手の土蔵の方に、洪作とおぬい婆さんの二人は住んでいた。母屋の医者は夫婦者で子供がなかったので、家の中はいつもしんとしていた。医者ではあったが、患者は殆どなかった。死にそんな病気にでもならぬ限り、部落の者はたれも医者などには診て貰わなかった。

洪作はそうした部落の旧道に沿った四五軒の家々から洩れて来る明りを横眼に見ながら、自分の家の屋敷にはいり、母屋の脇を通つて裏手の一段高くなつたところに建てられてある土蔵へと戻つて行く。洪作が戻る頃、おぬい婆さんは大抵、夏でも冬でも、土蔵の階下から洩れているランプの光をたよりに、戸外で炊事をしていた。炊事といっても、老婆一人子供一人の生活なので至極簡単な筈だったが、どういふものか、夕食の支度はいつも遅くなった。

「ただいま」

洪作は言った。「ただいま」といふような言葉は洪作以外村の子供たちは一人も使わなかった。併し、洪作はおぬい婆さんから、戸外から帰つて来たら必ずそういう言葉を口から出すように言い含められ、それに慣らされて来ていた。

洪作はおぬい婆さんと二人きりで、毎晩ランプの下で遅い夕食の膳に向った。

「坊^{ぼやう}」

おぬい婆さんは洪作のことをこう呼んだ。

「上の家の方へ今日は何度行ったかい」

「二度だ」

「あんまり行かん方がええ」

おぬい婆さんは言った。夕食の時、必ず二人の間に交される会話であった。洪作はそれに対していつもいい加減な返事をした。行かないことを約束するわけには行かなかったからである。上の家の附近が、洪作ら少年たちの遊び場の中心地で、一日に何度も水も飲みに行かなければならなかったし、珍しいものでも作っていればそれも食べに行かねばならなかった。

「上の家へ行くと、あんまりええことはないぞ。大五^{だいご}の餓鬼はほんとに小憎らしい。道で会っても知らん顔してけつかる。みつはみつで、前はほんに気前のええ子だったが、いまはみんなを見習うて、いつ会ってもふくれっ面をしよる。大方、大人たちが悪いことを吹き込んでいるずらよ」

おぬい婆さんの言うことは決っていた。洪作は三百六十五日、毎晩のように本家である上の家の悪口を耳にしなければならなかった。おぬい婆さんは本家の子供たちの悪口を言ったが、本当はその親である洪作の祖父母たちをやっつけたくて堪らないしかった。併し、さすがに祖父母の名は口には出さなかった。そうしたおぬい婆さんの心の内部は、子供の洪作にも手に取るよう

によく理解できた。

「上の家のおじいさんは嫌いだ」

時に洪作が祖父のことをこう言おうものなら、おぬい婆さんは眼を細めて、洪作の頭を撫でんばかりの恰好で膝をすり寄せて来た。

「洪ちゃんの本当のおじいさんだぞ。眼に余ることがあろうと、どんなこと言われようと、悪口を言うでないぞ。いいかい。上の家の衆は料簡は狭いがみんな根はいい人たちなんじゃ」

そんなことを言った。それは洪作に言うというより、自分自身に言って聞かせる言葉を声に出して言っているに違いなかった。

洪作は嬉しそうなおぬい婆さんの顔を見たいために、時々本家の上の家の悪口を言った。悪口を言う気になれば、実際悪口になる材料は幾らでもあった。洪作は同じ年のみつと毎日のように一緒に遊んでいたが、上の家の祖父母ははっきりと自分の孫より自分の娘の方を可愛がっていることを示したし、犬猿ただならぬおぬい婆さんに引き取られて一緒に住んでいるというだけで、洪作を自分たちの仇敵の片割れのように見る場合もあった。

また上の家には、洪作には曾祖母に当るおしな婆さんも住んでいたが、この曾祖母までが洪作をとかく色目で見がちであった。おしな婆さんは祖父の養母に当り、家の者たちと血の繋りはなかったが、みなからは大切にされていた。高齢のため居るか居ないか判らぬように奥の一室に閉じこもったままひっそりと生きていたが、いつかたまたま洪作と顔を合せた時、

「可哀そうに、ろくでもないもんの人質になって、この子はだんだん変な子になりよる」

と言ったことがあった。その時洪作は皺だらけの顔の中で口がもごもご動くのを見詰めていたが、やがて、

「おばあちゃん、いい年して死なんのか。いつ死ぬんだ？」

と言った。実際に洪作には、背を折れそうに曲げて、たるんだ皮膚に深い皺が刻まれている八十歳を越えた老婆が、いつまでも生きて口をきいているということが不思議に思われた。

おしな婆さんは洪作の言葉に呆れ果てたというように眼をしろくろさせて二の句が継げないという恰好だった。洪作は、おぬい婆さんを悪もんと言ひ、自分を変な子になったと言ったおしな婆さんに一矢報いてやり、一日中置物のように一箇所に坐ったまま動かないでいる老婆の許から離れた。

おぬい婆さんは曾祖父辰之助の妾であった。辰之助は地方では名医で通った医者で、第一回の三島の県立病院長をしたくらいだったから、若し彼が野心的な人間であつたら、晩年を郷里の伊豆などへ引っ込まなくてすんだ筈であつた。それをどういうものか、一番働き盛りの四十代半ばに、総ての公職を棄てて伊豆の山奥へ引っ込んで、田舎医者として余生を送つたのである。辰之助は田舎で開業医として忙しく暮した。駕籠で、半島の基部の三島や、またその反対の半島の先端部の下田まで、往診に出掛けるような繁昌ぶりを示した。

おぬい婆さんは、その辰之助が下田の花柳界から落籍して連れて来た女性で、それでなくてさへうるさい土地では、かなり色々取沙汰された人物であつた。おぬい婆さんは辰之助が五十五歳

で他界するまで蔭になり日向になりして辰之助の面倒を見、その死後も村に居ついてしまった確り者だから、村人全部から白い眼で見られるだけのことはあったようである。

辰之助は中年以後、正妻のしなとはずっと別居していた。しなは沼津の山本という家老の娘で、嫁に来てから一度も台所に出たことがないといった女性であった。よく言えば世間知らずのおっとりした女であり、悪く言えば、何もできない女であった。婚礼の時朱塗の風呂桶と二本の薙刀を持って来て、そのことが長く村人の語り草となっていた。

辰之助は本妻のしなとの間にも、妾のぬいとの間にも子供がなかったので、自分の兄の子供である文太を養子として迎え、それまでの家、つまり上の家を文太に譲って、自分は近くに家を一軒構えて、そこで開業して妾のぬいと住んでいた。晩年辰之助は文太の長女を分家させ、医者を開業していた家を与えることにし、その養母としてぬいを分家の籍に入れた。辰之助は妾のぬいの晩年をそのようにして酬いてやったのであった。戸籍上祖父の妾を養母とするようになった文太の長女は、洪作の母、七重である。

洪作の父は軍医で、その頃母七重と共に任地の豊橋に住んでいた。どうして洪作が両親の許を離れて曾祖父の妾ぬいの許に預けられるようになったか、当時の洪作には勿論理解の行かないことであったが、それはおしな婆さんの「悪いもんの人質になって」という言葉が、ある程度真相をうがった言い方であった。おぬい婆さんは、洪作の家に於ける自分の不安定極まる地位をもつと確りしたものにするために、洪作の両親から洪作を人質として取り上げるといった気持もないではなかったに違いなかった。

最初、洪作の母親が洪作の妹小夜子^{さよこ}を妊^{みこも}った時、人手が足りない理由でごく一時的に洪作はおぬい婆さんに預けられたのであった。おぬい婆さんは自分の懷ろに転がり込んだ願ってもない宝物を、一度手に入れた以上終生決して離すまいと決心したのに違いなかった。おぬい婆さんがそうした考えのところへ、洪作自身が、おぬい婆さんの許で五歳から六歳へかけての一年を過すうちに、両親よりおぬい婆さんの方になつてしまつて、家へ歸りたがらなくなつてしまつたことも大きな原因であつた。

こういうわけで、洪作は五歳からずっと郷里の伊豆半島の天城山麓の山村で、おぬい婆さんといふ全く血縁關係にはない女性と起居を共にすることになつたのであった。従つて、おぬい婆さんと本家の上の家とは、全く仇敵の關係にあつた。曾祖母のおしな婆さんにしてみれば、おぬい婆さんは自分から夫を奪つた不倶戴天の仇敵であつたし、祖父母たちから言わせれば、曾祖父辰之助に取り入つてついに本家よりも大きい家屋敷を手に入れ、しかも自分たちの娘を養女としてその義母になりすまし、いまは孫の洪作まで人質に取り上げてしまつてゐる腹黒い女であつたのである。

上の家は人の出入りの多い家だつた。平生は洪作の祖父母のほか、洪作と同年のみつ、みつより三つ年長の大五、それに曾祖母のおしな婆さんの五人暮しであつたが、この他に二人の人物が絶えず出入りした。それは東京の中学校へ行つてゐる大三^{だいぞう}と沼津の女学校へ行つてゐるさき子であつた。大三とさき子は休暇ごとに家に歸るのは勿論だが、それ以外でも日曜と休日が続いた

りすると、必ず家へ帰って来た。二人とも、洪作にとっては叔父と、叔母に当るわけであったが、みつが大三のことは兄さん、さき子のことは姉ちゃんと呼んでいたもので、洪作もまたそれに倣って同じ呼び方をした。

だから、正月とか、春休みとか、夏休暇の時は、上の家は大人数だった。食事の時などは子供の洪作の眼にもひどく賑かに見えた。朝から晩まで奥の一間に閉じこもっているおしな婆さんも、食事の時だけは躰を二つに折って、畳を嘗めるようにして食卓のある居間へ出て来たので、八畳の部屋はいっぱいになった。曾祖母おしな、祖父、祖母、大三、さき子、大五、みつと家族だけでも七人、それに大抵使用人が一人か二人いた。

祖父文太と祖母たねは子沢山で、この他にまだ四人の子供を持っていた。長女は洪作の母である七重であり、その下がアメリカへ渡っている大^{だい}一、満洲へ行っている大^{だい}二、それから同じ半島の西海岸の大きい農家松村家へ嫁いでいるすす江である。併し、洪作は大^{だい}一にも、大^{だい}二にも、またすす江にも会ったことがなかった。ただ名前だけは、何れもみつの呼び方に倣って、大^{だい}一兄さん、大^{だい}二兄さん、すす江姉さんと呼んでいたが、どのような風貌を持っている人物かは全く知らなかった。

祖母のたねが、時々、洪作がみつと同じような呼び方をするのを聞き咎め、

「坊は、大^{だい}一叔父さん、大^{だい}二叔父さん、すす江叔母さんと呼ばんといかん。兄さんや姉さんじゃない。叔父さんと叔母さんじゃ」

と訂正した。併し、洪作はそれに応じなかった。若しそうするなら、大三兄さんも大^{だい}三叔父さ

んでなければならなかったし、さき子姉ちゃんもさき子叔母ちゃんと呼ばなければならなかった。そんなことは考えてみただけでおかしくて口から出せないことだった。さき子姉ちゃんを叔母ちゃんなんて言えるかと洪作は思った。

併し、洪作はある時ふといたずら心から、さき子を叔母ちゃんと呼んでみたことがあった。さき子がどんな返事をするか興味があった。

「さき子おばちゃん」

洪作が呼びかけると、さき子は当時女学生の間で流行していた三つ編みの長いお下げ髪を、肩から前へ垂らしていたが、その髪の手をぽんとうしろへ投げて、

「おばちゃんなんて言っちゃいけない。そんなこと言ったらきかないから」と言った。

「だって、おばちゃんじゃないか」

「おばちゃんでも、おばちゃんなんて、二度と呼ばないでちょうだい」

さき子は怖い顔をして洪作を睨んだ。洪作がさき子を叔母ちゃんと呼ぶことに抵抗があるように、さき子もさき子で、自分がおばちゃんと呼ばれることを嫌った。洪作は大五のことは「五ちゃん」と呼び、みつのことは「みっちゃん」と呼んだり、仲違いしている時は「みつ」と呼び棄てにしたりした。

おぬい婆さんは上の家の子供たちのことは、面と対った時は別だが、蔭では殆ど呼び棄てにした。呼び棄てにするばかりでなく、大抵悪意のある形容詞をつけた。「ぐずのおみつ」、「あくた